

## 新潟市潟環境研究所 第4回月例会議（概要）

日時：平成26年7月16日（水）午後3時～午後5時00分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

### ■会議概要

#### 1 開会

#### 2 報告及び情報提供

- ・潟環境研究所ホームページ「潟のデジタル博物館（仮称）」についてのアンケートまとめについて（コンセプトやターゲットユーザー、サイトデザインなど）（事務局）
- ・「佐野藤三郎記念シンポジウム～遙かなる水郷から 世界の「食の都」へ（主催：佐野藤三郎 記念シンポジウム実行委員会）」の紹介（都市政策部）

#### 3 講義「新潟平野の湖沼群の魚類相・・・過去と現在」

（井上 信夫 研究補助員/生物多様性保全ネットワーク新潟 事務局）

##### <魚類相について>

- ・越後平野の主な湖沼の魚類相は、純淡水魚が全体の約60%を占め、約40%が回遊魚や汽水海水魚である（純淡水魚38種、遡河回遊魚11種、降河回遊魚2種、両側回遊魚4種、汽水・海水魚10種）。
- ・潟の成り立ちによって魚類相は違うが、潟湖は河川の一部だったため、海と繋がっており、魚類相が豊富である。一方で砂丘湖は、閉鎖的で、潟湖に比べて魚類相は単純である。
- ・潟湖の多くは干拓によって消滅し、構造物によって河川が海と遮断されてしまった。現在、新潟市の中で海と自由につながっている潟湖はない。鳥屋野潟は湖岸部の改変や、生活排水等によって水質悪化が進行しており、魚が棲む環境としては非常に厳しくなっている。
- ・また、砂丘湖だが、松林だったところが宅地化され、湧水・浸透が無くなったために地下水が低下し、水が干上がっている。その典型的な例がじゅんさい池である。
- ・角田山麓にある上堰潟は、半ば人工的に復元した潟で、他の湖沼と性質が異なる。仁箇堤から流れてくる用水路ではオイカワ・モツゴなど9種類の魚を確認した。魚類の種数としては少ない方である。
- ・現在、新潟の湖沼では、環境の変化により汽水・海水魚はほとんど見られなくなっている。また、他の種類の魚類も減少しており、過去の魚類相と全く違うものになっている。
- ・例えばイトヨは、30年ほど前には越後平野のどこでも確認することができたが、現在はほとんど確認することができない。また、カワヤツメも激減し、今や絶滅危惧状態である。

##### <外来種について>

- ・外来生物とは、人の力を借りて、他の場所から来た生物（外国や、国内の他の地域から来た生物）のことである。
- ・外来生物のすべてが悪いわけではなく、特に問題のある生物はごく一部である。特に在来生態系に甚大な影響を及ぼす外来種のことを、侵略的外来種と呼び、その中で規制・防除の対象となるものを「特定外来生物」と呼ぶ。
- ・特定外来生物に指定されている生物種の一つにオオクチバス（ブラックバス）がいる。県北から県南部まで生息域が広がっており、在来種に影響を及ぼしている。外来種は外来生物法によって飼育、再放流が禁止され、罰則も付いているが、密放流が後を絶たない状態である。
- ・自然観察会では外来種についてもしっかりと説明を行っている。本物の自然を子どもたちに原体験させ、正しい自然観を身に付けてほしいと考えている。